

サゴヤシ研究に80歳からの人生をささげた長戸 ^{いさお} 公先生

下田博之

1. サゴヤシ研究のはじまり

戦前から戦後1960年代頃までのサゴヤシに関する研究は、主としてサゴヤシが自生分布する地域の民俗学的人類学的研究が主な課題で、植物資源としてのサゴヤシに関する研究は、戦前この地域の宗主国であったオランダやイギリスの植物学者や農学者による限られた研究だけでした。

植物生理生態学的あるいは遺伝学的研究、さらにサゴヤシデンプンの特性や利用に関する研究は、マレーシア、インドネシア等で、1970年代に入る頃から始まったと思われます。このことは、第1回国際サゴヤシシンポジウムが1976年に、その第2回目が1979年に、いずれもマレーシア国で開催されたことから窺い知ることができます。

日本でのサゴヤシ研究は1977年4月、日本熱帯農業学会の中に13名ほどの委員で構成するサゴヤシ研究部会（主査：神戸大佐藤孝）が設置されたのが本格的なサゴヤシ研究の始まりと言えます。この研究部会の設置を強く希望し、部会の運営経費などに大きく貢献されたのが長戸公先生です。3年間にわたる部会の研究成果は、1979年4月開催の第45回講演会で9課題に分けて発表され、同年10月「熱帯農業・第23巻第3号」に特別研究として掲載されました。

2. 若いころジャワ島の農園で学ぶ

長戸公先生については、先生がご他界された年の本誌 Vol. 2, No. 1 に「長戸公会長を悼む」の追悼文を記載しましたが、以下に出来るだけ重複を避けて思い出すことなどを記してみます。

長戸先生は大正9（1920）年東京帝国大学農学部農学実科（現東京農工大学農学部）を卒業後

ジャワ島に渡り、オランダ人経営の大農園に入って熱帯植物とその栽培を学び、後に約20年間農園管理者として勤めました。農園での栽培作物はゴム、コーヒー、その他の永年作物で、これらの農園管理に際し特別に関心をもって当たられたことは、「熱帯の厳しい環境条件下での土壌侵食による土壌の瘦薄化の防止対策だ」と良く語られていました。耕地表土の裸地化を可能な限り避けた園内の常時草生栽培や等高線栽培、テラス園造成などが必要不可欠であることを力説されました。帰国後も大学研究室の研究生として通い、熱帯農業についての研究意欲とその情熱は聊かも衰えませんでした。

戦後の昭和32（1957）年、日本熱帯農業研究会（現同学会）の設立に際しては発起人に加わり、当初から幹事として学会への発展に寄与されました。

東京小平市の自宅に熱帯植物資源研究センターを設立し、堪能なオランダ語などの語学を駆使して、広く熱帯農業についての諸外国の分権、情報収集に当たられました。収集した内外の文献は数千点にのぼり、それを学会誌「熱帯農業」誌上に連載して公表し、研究者、民間企業等への利用に供しました。

3. 80歳からのサゴヤシ人生

日本熱帯農業学会にサゴヤシ研究部会を設置したときの長戸先生は、すでに80歳の高齢にも拘わらず、矍鑠として部会長の佐藤孝先生の下で、活発な研究活動を進められました。

或る時の熱帯農業学会幹事会の後の雑談の席で、当時の学会長・西川五郎先生が「長戸先生のごことは今後下田がやるんだな」と言われた言葉が今でも記憶に残っています。なぜ私にと戸

惑ったのですが、後に、長戸先生は私の勤務する農工大学の前身の東京帝大農学実科のご出身であること、さらに当時の先生のお住まいが私の勤務先の大学にほど近いことが、その様な役割を与えられた理由であったと理解するようになりました。

サゴヤシ研究部会のメンバーの一員に加えていただいた私は、その後の先生の生涯の事業として打ち込まれたサゴヤシに関する研究と、研究者助成活動の一端をお手伝いすることになりました。その頃だったと記憶していますが、先生から「サゴヤシの主要な生育地は熱帯の低湿泥炭地だ。そこで、土壤の研究者を一人身近に欲しい」と言われました。現岡崎正規会長が私の願いを受けてサゴヤシに足を踏み込むことになった由縁です。

その当時の日本熱帯農業学会の特別会員であった日本パプアニューギニア（PNG）友好協会は「PNG熱帯植物資源の活用に関する調査研究」を企画し、私はその委託を受け、昭和56年（1981）からPNGセピック川下流域のサゴヤシ林の調査を数年間にわたり開始することになりました。同友好協会会員には太平洋戦中PNGでの激戦に参加し、戦後無事帰還した旧軍人が多く含まれていました。この島での13万人余の戦死者の約70%は餓死者であったと推定されている中で、幸い帰国された協会員の人はしばしば、「私共は野生のサゴヤシデンプンのお陰で生き延びることが出来た」と語る機会を私は度々経験しました。そのサゴヤシに対する強い思いが協会事業として浮上したことを知って、サゴヤシに関して更なる興味を感じ、PNGでの調査研究に当たったことをいま思い出しています。

4. 日本サゴヤシ研究基金から日学振・熱帯生物資源研究基金へ

当時は、世界の急激かつ継続的な人口増加と、それに伴う食糧不足の到来を予測する論調が盛んに聞かれた時代でした。先生は高いデンプン生産性を有するサゴヤシの有望性を高く評価し、

その研究の重要性を力説されるとともに、1981年、自己資金をもって日本サゴヤシ研究基金を設立し、先ずサゴヤシ研究者助成事業を開始しました。同時に将来を見越して、幾つかの大学に「学生サゴヤシ研究クラブ」を結成させ、サゴヤシが分布する熱帯諸国に一定期間調査研究に派遣する研究助成を始められました。その折の学生クラブのメンバーで、現在サゴヤシ研究者として活躍しておられる方も何人かを数えることが出来ます。

その5年後の1986年には、1億円を超える自己資金を日本サゴヤシ研究基金に増額して、それを日本学術振興会に移管し、熱帯生物資源研究基金を設置することになりました。この基金設置の際、先生は私に、学術振興会側との事務的折衝役を申しつけられました。基金の名称を今まで通りの「サゴヤシ基金」とすることを望んだ先生に対し、学術振興会側はサゴヤシ1作物に限定せず、広く熱帯生物資源とすることに拘り続けました。何回かの折衝の結果として、名称は「熱帯生物資源」とするが、「当分の間サゴヤシに限った研究」に対し助成するという折衷案が生まれ、長戸先生によりやく納得して戴いたことを今でも忘れません。このように先生の並々ならぬサゴヤシへの思い入れが実って、サゴヤシ研究者も次第に増加し、1992年にサゴヤシ・サゴ文化研究会が設立され、初代会長に就任されましたが、その2年後の1994年に98歳の長寿を全うして他界されました。2000年には生前先生念願のサゴヤシ学会に発展し今日に至っていることを先生ともども喜びたいと思っています。

5. 国際的研究助成

長戸先生は国内のみならず国際的な研究活動にも積極的に活動を惜しまず、1985年には東京で第3回国際サゴヤシシンポジウムを自己資金を用いて開催し、海外からの多くの研究者を招きました。それ以来現在に及んですでに9回を数えます。2002年にも筑波を会場に日本で2回目の国際的なサゴヤシのシンポジウムを開催す

ることとなりましたが、この際も先生が生前、将来の開催費として遺された資金に大きく依ったことを忘れてはなりません。

思い出せばかつて先生から云われた言葉の中に、「日本国内の研究助成などの事業は君がやり、海外の事業は京都大の高村先生にやってもらう」がありました。高村先生は国際シンポジウムのことからケニアへのサゴヤシ苗移植の研究ほか、色々な海外と関連する諸課題、事業を長戸先生に代わって務められたのです。

最初の頃は海外で開催されたシンポジウムでの日本人研究者の数は少なかったのですが、今では他国を圧倒する研究者数と、世界をリードする高いレベルの研究成果が発表されるようになり、長戸先生のお傍で、サゴヤシに懸けられた80歳からの先生の人生にお伴させていただいたことを望外の喜びと感じているのは私だけでなく、高村先生も同じと信じています。

四谷の日本学術振興会の一年一度の研究助成者選抜会議には、晩年移り住まれた熱海から新幹線でお出でになり、熱心に研究計画に耳を傾けられていました。基金の創立者であっても、決して恣意的な意見をお出しすることなく、適正な助成者決定に心掛けておられたことを今思い出しています。

御帰りには必ず東京駅まで同伴を促し、駅地下街のレストランで夕食をご馳走してくださいました。食事中もこの1カ年間の内外の研究状況について質問を受け、答えに窮することも儘あって、赤面の至りだったことも思い出の一つです。

わが師長戸先生がサゴヤシ研究の重要性を説かれて、研究者養成を始められてから今年で34年、先生が他界されてからはや15年が過ぎようとしています。今なお遺された基金の恩恵を受けて、東南アジアやメラネシアの島々を巡り、サゴヤシに取り憑かれて研究調査に励む人も少なくなっていくことを、先生もさぞかしお喜びのことと思っています（平成23年3月1日記）。